

種 第 一 號

日本現代文學
全集

46

倉阿生
田部田
百次長
三郎江
集

日本現代文學全集・講談社版 46

江郎三
長次百
田部田
生阿倉
集

編 集
伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健

日本現代文學全集

46

生田長江・阿部次郎・倉田百三集

編 集

伊藤 整
龜井勝一郎
中村 光夫
平野 謙吉
山本 健吉



昭和42年9月10日 印刷

昭和42年9月19日 發行

定 價 600圓

© KODANSHA 1967

著 者
い く 生 阿 倉
た 田 部 田
ち 長 次 百
よ う 江 郎 三
こ う 江 郎 三

發 行 者 野 間 省 一
印 刷 者 北 島 織 衛

發 行 所 株 式 會 社 講 談 社

東 京 都 文 京 區 音 羽 2-12-21
電 話 東 京 (942) 1111 (大 代 表)
振 替 東 京 3 9 3 0

印 寫 版 製 背 表 紙 口 本 函 見 扉
真 印 刷 本 兩 皮 紙 繪 文 貼 返 し 用 紙
大 日 本 印 刷 株 式 會 社
興 陽 社
株 式 會 社 大 進 堂
岡 山 紙 器 所 井
株 式 會 社 石
日 本 ク ロ ス 工 業 株 式 會 社
日 本 加 工 製 紙 株 式 會 社
本 州 製 紙 株 式 會 社
安 倍 川 工 業 株 式 會 社
三 菱 製 紙 株 式 會 社
神 崎 製 紙 株 式 會 社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

生田長江集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

自然主義論……………七

最近の小説家

夏目漱石氏と森鷗外氏と……………一七

田山花袋氏……………三

島崎藤村氏……………一六

泉鏡花氏……………一四

徳田秋聲氏……………一四

眞山青果氏……………一〇

自然主義前派の跳梁……………一〇

重ねて自然主義前派を論ず……………七一

——赤木桁平君に答ふ

所謂人道主義改造論者の不徹底……………一三

ブルジョアは幸福であるか……………一三

「近代」派と「超近代」派との戦……………一〇

天路歷程……………一〇

作品解説……………高田瑞穂 一〇

生田長江入門……………紅野敏郎 一七

年 譜……………一三

参考文献……………一四

阿部次郎集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

三太郎の日記抄

山上の思索	一三
生と死と	一五
個性・藝術・自然	一七
自己を語る	一八
形影の問答	二〇
郊外の晩春	二四

碎かれざる心……………一四

藝術のための藝術と人生のための藝術……………一六

夏目先生のこと……………一六

思想上の民族主義……………一七

人格主義の思潮……………一七

亡師亡友

幸田先生……………一三

桑木先生を悼む……………一五

茅野夫妻と私……………一六

太田正雄君追哭……………一八

點描日本文化 第二部

日本文學の將來……………二〇

私の古典研究	二四七
假名づかひ問答	二五二
風景問答	二五九
古典問答	二六五
作品解説	高田瑞穂 四三
阿部次郎入門	紅野敏郎 三〇
年譜	三二
参考文献	四五

倉田百三集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

労働運動の道德的根據に就いて……………三六七
父の心配に就いて……………四〇四

出家とその弟子……………三三三

作品解説……………高田瑞穂 四一四
倉田百三入門……………紅野敏郎 四三三
年 譜……………四三七
参考文献……………四四六

愛と認識との出發抄

憧憬……………三六一

——三之助の手紙

生命の認識的努力……………三七三

異性のうちに自己を見出さんとする心……………三六五

静 思抄

生田長江集

花吹雪正に竹也
盧余邦并
長江

自然主義論

第一章 自然主義とは何ぞや

美學上概念としての自然主義——歷史上概念としての自然主義——自然主義の理想と其實際

抑も自然主義なるものは、美學上之を云ふ場合と、文藝史上之を云ふ場合と、各二様の意義を有して居る。

美學上概念としての自然主義とは、客觀自然の忠實なる摸倣踏襲を以て、藝術の能事^{じき}了れりとし、或は人間自然の性情を發揮し、敢へて飾らず^{かざら}ず蔽^{かざ}はざるところに、藝術の本領ありとするものを云ふ、換言すれば、有りの儘を描き有りの儘を談ずる、是が即ち自然主義なるものゝ眞髓^{しんずい}なのである。しかしながら、這の美學上に謂ふところの自然主義は、吾人が是から論じやうとする中心題目ではない。

歷史上概念としての自然主義は、その人を異にし、場合を異にするに從つて、随分色々^{いろいろ}の解釋を下さるゝものではあるが、其中比較的に最も多くの人が、最も多くの場合に於て一致するところの解釋を、左に述べて見やうと思ふ。尙ほ自然主義の寫實主義、象徴主義等に對する關係は、後段、自然主義なるものゝ一應の概念を作つた上で、説明を試みるつもりである。

文藝史上の自然主義とは、究竟近代主義、輓近派^{ばんきんぱ}の義である。獨逸語に謂ふところの Die moderne の義である、精しくは、十九世

紀の中葉以降、佛蘭西を中心としたる大陸文藝の一般思潮をさして、自然主義とは云ふのである。

凡そ物には理想と實際との両面がある。自然主義にもまた此兩面あるを免れぬ。自然主義の主張するところのもの、要求するところのもの、並びに標準とするところのもの、即ち理想としての自然主義である。かの長短並び存する自然主義文藝從來の成績が、實際としての自然主義である。

世の自然主義を難するもの、大抵は這の、自然主義の實際を見て理想を見ず、自然主義者自らはまた、専ら夫の理想を説いて實際に及ばず、最近時の文壇、數々無用の論争ある所以であらう。

第二章 自然主義の理想

(一) 實際的傾向——作者自身の周圍より材料を取ると云ふこと——親切主義——事實らしく描くと云ふこと

(二) 印象の鮮明——(三) 習俗の打破——形式上並びに内容上——寫生文と自然主義——(四) 特性の尊重——地方的特色——(五) 人間獸性の表現——二元論的見解——(六) 嚴肅なる態度——謂ふところの「眞の偏重」

自然主義の理想、或は理想としての自然主義は、輓近派藝術の代表的作品と稱せらるゝものに、比較的共通なる傾向に徴し、またかの自然主義の唱導者もしくは辯護者と云はるゝ人の評價の標準を參照して之を知る。理想としての自然主義の概念を作るに際し、自然主義者正面の主張を聞いて見た丈^{だけ}では、殆んど要領を得ないからである。モオパッサン、ゾラを始めとして、自然主義一派の諸作家は、其藝術論によつて之を見るに、大抵は皆自己の嚮ふところ、志すところを明示して居ないやうに思ふからである。(フォルケルト

氏「審美上時事問題」「自然主義」の條参照)

理想としての自然主義はまつ、

(一) 實際的傾向 (Realistic Tendency) を有しなければならぬ。而して此實際的傾向は、種々なる意味に於て要求せられて居る。在來の文學、とくにロマンチズムが、隔りたる時代と隔りたる場所とに、大なる興味を有つて居たのに對し、成るべく現在現前の生活、換言すれば、作者自身の周圍から材料を取らうと云ふのが第一、又特に人の興味を惹き付けるやうな内容を必要とせず、寧ろ之に對するものをして、如何にも親しい、馴れ／＼しい感じを起させさへすればよいと云ふ、是が第二。親切主義 (Intimismus) の名を以て呼ばれるもの、かのコンステブル、ルッソ、ミレ等の繪畫は、最も先づ此意味に於て實際的傾向を示さむとしたものである。第三は事實上あり得べきこと、ありさうなことを描寫せんとするもの、云ふまでもなく、是が最も重要な意味に於ての實際的傾向である。乃ち自然主義の藝術にありては、あり得べからざること、あり相にもなきことを不自然なりとして第一に排斥する。

(二) 印象の鮮明 (Visualization)。世間には此ギジュアライズすると云ふことも、前のリアリスティックに書くことと云ふこともを混同して居る人も少なくないやうだが、是は是れは誤解である。けだし新聞の三面記事などは、大抵皆有り得べき事件、有りさうな事件である。其意味に於てリアリスティックである。しかも其リアリスティックな事件を目のあたり見るやうに描き出したものは減多でない。乃ち實際的傾向と、印象を鮮明ならしむると云ふことは、別物である。而して自然主義の藝術ほど印象の鮮明を尙ぶものはない。

(三) 習俗 (Conventionalism) の打破。之は藝術の形式に就ても云ひ得られるし、内容に就いてもまた云ひ得られる。

形式上より云へば陳套なる一切の様式を捨てるのである。生命なき型からして脱却しやうと云ふ努力である。新しき思想、新しき感情を盛る爲めには、新しき文體をも作らねばならぬ。新しき造語を

もせねばならぬと云ふ、即ち是である。かの技巧排斥と云ひ、技巧なき技巧といふもの、また此習俗の打破に急なるものゝ呼聲に外ならぬ。

内容の上より云へば、在來の傳習的思想に對するプロテスタントとしての態度である。一切の舊道德的信仰に對する反抗である。

序でながら、我文壇の寫生文などは、右の實際的傾向を帶ぶる點に於て、印象の鮮明を尙ぶと云ふ點に於て、また形式上習俗を打破すると云ふ點に於て、自然主義と殆んど同一軌道を走つて居るものであるが、今此内容上習俗の打破と云ふ問題に至つて、はじめて自然主義と袂を分つた。

(四) 特性の尊重。在來の藝術に於て美と云ひ、優美と云ひ、また壯美と稱するもの、輓近派にあつてはそれほど重きを爲すものではない。むしろ事物それ／＼の特性を表現するところに、より大なる價値ありとする、今の小説脚本等に於て、切りに地方的特色 (Local Color) と云ふことを云ふのは、一面もとより實際的傾向に伴隨した傾向でもあらうなれど、また一面、這の特性の尊重にも基くところあるを忘れてはならぬ。

(五) 人間獸性の表現。美醜の詮議に代ふるに特性の尊重を以てするは、やがて謂ふところの世界の醜化 (Verhässlichung) と相連する。抑も人生には光明と暗黒との両面がある。從つて人間社會の眞相を暴露すると云ふのは、此兩面の描寫を兼ね有するものゝことになければならぬ。ところが從來の文藝は、あまりに人間の暗黒面を看過して居る。光明ある方面のみ誇張してかいて居る。されば輓近派は其偏狹を補はむが爲めに、先づ主として人生の暗黒面を摘發指示する必要がある。人間獸性の表現が問題となるに至つた所以である。

人間獸性の表現は、人間性情の二元論的見解の上に成立する。(ブランドス氏「人間の獸性」参照) 即ち先づ人性に、人間的なるものと、獸的なるものとの二面あることを認めて居るのである。輓近

の藝術特に文學に於て、這の獸性の表現に、如何ばかり重要な意味あるかは、アレキサンダー・ジュマ、モオパッサン、ゾラ、プルゼエ、ダスニチオ、ビュロンゾン、イブセン、トルストイ、ドストエウスキイ、ゴルキイ、ストリンドベルヒ等の小説戯曲に顧みて、最もよく知ることが出来る。

自然主義に謂ゆる獸性は、象徴に非ず、譬喩にあらざり、生物學的意味に於ける獸性である。

この人間の獸性に對してトルストイ、ストリンドベルヒ、アレキサンダー・ジュマ等二三の人は、今日の發達し過ぎたる文明が生むだもの、餘りに自然を遠ざかつた超文明、惡文明の所産であると云ふに對し、爾餘多數の作家は別種の解釋を下す。即ち人間の兇暴殘忍なる性質や、男女兩性間の肉慾的衝動や、奪掠占有の本能や、是等の性情は凡べて皆、野蠻時代未開時代からして今日に傳はつた遺風殘俗であると説く。更に遡ぼつては、人間が虎や、狼や、狐や、狒々であつた時代からの本能をそのままに保存して居るものと見る。つまり進化論の立場からして、人間の獸性を認めて居るのである。

が、之を要するに、獸性は明かに生物學上意義を有するもの、單に譬喩として、また象徴として用ひられたる言葉ではないのである。

ともあれ、這の所謂 *Herabwürdigung des menschen zum rathen Thiere* を以て輓近文藝を難ぜむとするの人は、之を難ずるに前立ちて先づ從來の文藝の、餘りに人間社會に於ける暗黒面を見逃し過ぎて居たことを思はなければならぬ。

(六) 嚴肅なる態度。作家の人生に對する嚴肅なる態度の現れて居ること、輓近文學の如きは少なからず。大抵は懷疑的、もしくは虛無的ではあるが、兎に角或る嚴肅なる考を以て今の作家は人生に對して居る。已に大部分が懷疑的であり、虚無的である以上、習俗の道德宗教等に對して、直接貢獻することの稀なるは勿論、寧ろ多

くの場合それ等のものに對する革命反抗として現れて居るのであるが、しかも尙ほ謂ふところの嚴肅なる態度、第一義に於ける倫理的態度は、如何なる場合にあつても棄てないのである。

乃ち第一義に於ける倫理的態度は、人間社會の暗黒面を取扱ふ場合、人間の獸性を忌憚なく表現し來る場合にも、常に保持せられて居る。むしろ斯かる場合に於て最もよく保持せられて居る。

殺人ならば殺人と云ふやうな獸的行為にして、昔の「ニイベルンゲン・リイト」や、マロオの「タムパレレン」などに現れた殺人と、今日のゾラの「獸」や、ドストエウスキイの「罪と罰」などに見える殺人とは、作家の之に對する態度が全然違ふ。同じく性慾の衝動を描くにしても、ポッカチオの「デカメロン」や、ハインゼの「アルディングゲロオ」などと、今日のモオパッサンや、トルストイや、ストリンドベルヒなどの作物とを比べて見ると、非常に其意味が異つて居る。

今日の人が、主として暗黒面を描き出さうとするのは、一つは從來の偏頗なる傾向に對する反動でもあるが、また一つは此暗黒面に於て、彼等が最も痛切なる倫理問題に觸れて居るからだ。

世上、近代文藝の傾向を難するに、眞の偏重と云ふことを以てする人あれど、其非難は當つて居らないやうだ。蓋し、自然主義に謂ふところの眞は、眞善美對立の眞に非ず。習俗の眞と云ひ、善と云ひ、美と云ふものに對し、更に一層根本的なる「或るもの」、またそれらのものを統一すべき「或るもの」を要求して居るのである。這の「或るもの」は、今日のところたゞ「或るもの」とのみ云つて置くのが便利である。しかして此「或るもの」を獲むが爲めには、習俗の眞善美等一切のものを犠牲に供して憚らないのである。

所詮、自然主義の文藝を以て、習俗の善美と對立する習俗の眞を偏重するものとなすは、淺薄憫むに堪へたる見解である。

以上述べたる實際的傾向や、印象の鮮明や、習俗の打破や、特性の尊重や、人間獸性の表現や、嚴肅なる態度や、是等は自然主義者

の最も先づ理想とするところのものである。若しくは、理想としての自然主義が要求し、標榜するところの、最も重要な事項である。

第三章 自然主義の實際

貧弱なる内容——平凡主義——實際の事實をのみ記録すると云ふこと——緻密に過ぎたる描寫——藝術の普及に伴ふ俗化——貴族的精神の滅却——境遇の過重——特性の誇張——獸性の誇大——ゾラの偏見——自然主義と客觀主義の詮議——自然科學者の態度——流行を追ふもの——利弊何れか多き——

前にも已に述べたるが如く、自然主義の理想と、其實際とは別である。理想としての自然主義が、反對者の多數が見て居るやうなものでないと同様に、實際としての自然主義は、自然主義者の大部分が考へて居るやうな、圓滿無瑕なものではない。その、理想としての自然主義と相違する點を次ぎに述べて見やう。

(一) 實際的傾向と云ふものに對して、實際自然主義が踏むて來た経路はと云ふに、なか／＼其の主張通り、要求通りには行かないものがあつたらしい。第一に、専ら作者自身の周圍から材料を取ると云ふ傾向に附帶して、作者の経験が淺く、閱歴が充分ならざる場合、描寫材料の貧弱と云ふ非難を招いた。また其貧弱なる材料を數々繰返すことによつて、單調平板の誹りを免れなかつた。日本の新自然主義なども、是れまで、だいぶかう云ふ批評を受けて居たやうである。

第二には、故らに人の注意を惹くやうな内容を要しないと云ふ主張、またたゞ、親しい、なれ／＼しいと云ふ感じを人に與へさへすればよいと云ふ主張が、いつの間にか一轉して、一切の所謂興味

ある題目を排斥するやうになつた。平凡主義 (Trivialism) である。繪畫などにはとりわけ多い。我が國の寫生文などにも、だいぶ此弊に陥つて居るものがあるやうだ。

第三には、有り得べきこと、有りさうな事を描くと云ふ主張を誤解して、實際にあつたこと、換言すれば實際の經驗さながらを、記録しなければならぬといふやうに考へたものがある。是れは全く心得違な話で、自然主義本來の標榜は、單だありさうな事、あり得べき事を描きさへすればよいのだ。またよし實際の事實でも、作品として實際らしく見えぬ場合には、藝術上自然の誹りを免かれぬ。蓋し、世間には眞らしい偽があると共に、時には偽らしい眞があるからである。即ち事實らしくない事實が往々にしてあるからである。

(二) 印象の鮮明を尙ぶと云ふ傾向に就いて考へて見るに、中には非常に之を尊重するの餘り、微に入り細を穿つて解剖する、或は逐條描寫を試みる。而して竟に煩瑣に過ぎ、冗漫に流れ、却つて印象の鮮明を失ふものがあつた。ゾラ、ガルボルグ、ドストエウスキイ等の諸作は隨分此弊に陥つて居る。ツルゲニエフの「獵人日記」などもやゝ之に近いものがあつた。

(三) 習俗の打破と云ふことに於ても、實際には多少の弊害が伴ふて居る。形式上から云へば、凡べての型をこはすと云ふことは、繪畫ならば繪畫に固有なる、脚本ならば脚本に固有なる、また小説ならば小説に固有なる様式を破ることなので、何でも一帯に解り易く、這入り易くなる。而して此 Popularisation (普及) につれて Vulgarisation (俗化) が行はれる。即ち從來韻文的なりし文學が散文的となつたのも、韻文でかゝれた脚本が散文でかゝれるやうになつたのも、文學の中でも小説が最もひろく行はれるやうになつたのも、また我が日本の藝苑に就いて云つて見れば、素人の演劇、素人の小説が頻りに流行し出したなぞも、その根底は型をこはすと云ふ精神から來て居つて、一面はたしかに藝術の普及であると共に、一

面はまたその俗化を來したる證據である。

内容の上から云つて見ても、習俗的思想の打破は、多くの場合 Authority (教權) の打破なので、従つて稍や平民的精神を伴ひ、貴族的の氣風を滅ぼした、よき意味に於ける貴族的の氣風を滅ぼした。

(四) 特性の尊重と云ふことは、大體自然主義者一同の志すところではあるが、一面彼等はダルキンの適應論 (Adaptation) などに基いて、四圍の境遇 (Milieu) が人物を作り出すもの、即ち人物の個性特性は四圍の境物的狀況の所産であると考へた。是れは勿論ゴックウル、ドオデエ、ゾラ等の諸作に於て見る如く、描寫の技巧に大に貢獻したるところもあるけれど、しかも或る場合には、この境遇の意味に重きを置き過ぎて、却つて人の性格を埋没せしめたこともある。

又或は、個性特性を餘りに重んじ過ぎたる結果、たとへば、四角い火鉢の角を、鋭角にすると云つたやうに、其の特有なる點を誇張して描き、遂に不自然となり、滑稽となり了つたものもある。

(五) 人間の獸性は、前にも已に述べ置いて置いたる通り、從來の傾向に對する必要の反動でもあり、また近代人が此點に於て最も嚴肅なる倫理問題に觸れて居ると云ふ事情からでもあるが、専らこの暗黒面のみ描いて居る中に、また多少之を誇大してかいて居る中に、いつとは知らず、人生其物に暗黒面丈けしかないものゝやうに考へて來た。乃ち當初は、人性に人間なるものと、獸的なるものと二元あることを認めて居たに係らず、人間は全然獸的なるものであると見るやうになつた。斯う云ふ考を以て人生に對するからして、人間は凡べて狼のやうに残忍で、狐のやうに狡猾で、狒々のやうに淫亂なものとして來る。乃ち人生の真相を暴露すると云ひながら、却つて其真相に遠かつた。

特にゾラの如きは、人は酒を飲めば必ず亂暴をするものである、貧乏をすれば必ず泥棒をするものである、心理上生理上性質は、必

ず遺傳するものであると云ふやうな、科學上原則に絶対信任を置いて、それとまぐ當てはまるやうな、換言すれば、其原則を都合よく説明するやうな事件を描寫した。アアシア・シモンズ氏が彼の自然主義を評して、一種の偏狹なる理想主義に過ぎぬと云ふたのは、誠に無理もないことだと思ふ。

(六) 人生に對して嚴肅なる態度を取ると云ふこと、とりわけ人間獸性の表現に際して嚴肅の態度を取ると云ふことは、理想としての自然主義の要求するところでもあり、また實際に於て、輓近作家の大部分に適用せらるゝものでもあるが、しかし、中には多少の例外がある。

自然主義を解して、純客觀の態度を取るのであるとか、客觀に多少の主觀を加へたものであるとか、又は主客兩觀の融合するところに自然主義の本領があるとか、其他種々なることを云ふ人もあるが、たとへ理想としての自然主義にもせよ、主觀客觀と云ふやうな言葉で以て、自然主義全體をひとまために説明しようとするのは無理である。事新しく認識論を提出して來るまでもなく、純客觀もしくは純主觀のみで事物を觀ることが出來やう筈はなく、表現描寫の出來やう筈もない。されば自然主義者の人生に對する態度が、純客觀でもなく、純主觀でもないのは勿論のことだ。而して其主觀的たり客觀的たる程度は、その人を異にするに從つて皆各々異つて居る。之を一括して主觀客觀の詮議を試みやうとするものは、決して輓近藝術に對する公平の觀察とは云はれないのである。

自然主義者の、大に客觀的態度に偏いたものは、殆むどかの自然科學者が鑽石を分析するやうに、植物の雄蕊雌蕊を解剖するやうに、蜜蜂の生活情態を觀察するやうに、極めて冷靜なる、また極めて冷淡なる態度を取つて人間を分析し、解剖し、觀察した。是は單に譬喩ばかりでなく、實際に於ても彼等の或ものは、生理學上並びに心理學上の智識を基礎として、特に人間の病的現象を研究した、立派な科學者なのである。而して是等の人の場合に於ては、固よ

りふざけた態度と云ふのではないけれど、またそれ程嚴肅なる態度を取つたものとは云へなかつた。即ち痛切なる第一義の倫理問題にはあまり觸れないで居たやうだ。自然主義の理想よりして見れば、その未だ至らざるものである。

又或は、其主觀的に傾けると、客觀的に傾けるとに論なく、一般にたゞ流行を追ふて、漫然自然主義の形骸を模したばかりのものもある。殊に自然主義にあつては、とりわけ嚴肅にとり扱はるべき筈の獸性表現に、極めて不眞面目なる態度をもつて對したるものもある。中には低級讀者に媚びたる肉感挑發の作物を辯護する爲めに、自然主義の名を藉りたるものもある。我が文壇の自然派などにも、若しかう云ふ不眞面目な作家があるとすれば、自然派其ものゝ爲めに先づ悲むべきことである。

自然派の實際には如上の弊害を外にして、尙ほクラシシズムに所謂統一、調和、中正、平明等、ロマンチシズムに所謂感情の熱烈、空想の奔放等の藝術上軌範をあまりに閑却し過ぎたやうな點もある。また一體に藝術家天賦の才能を輕視するやうな風も一方には見えた。換言すれば、藝術上不易の眞理たるべき Hero worship (英雄崇拜) と云ふことを忘れたものもあつた。細かく吟味を加へたならば、弊害はまだあるだらう。

之を要するに、自然主義者が實際上經歷に就いて見れば、其理想を實現し得なかつた點は隨分ある。またその理想としての自然主義には主張もされず、標榜もされなかつた風潮傾向が少からず伴つて居る。

世の自然主義を批評せむとするものは、這般よばの事理を明にした上で、是非の決定を與へなければならぬ。

ところで前述の如き弊害は、どうしても除き得られぬか。あのやうな主張要求に對しては、必ずまたあのやうな弊害が伴ふものであらうか。除き得られたならば文句はない。除き得られぬとしたらばどうか。

物には必ず利弊功過の両面あるを免れぬ。取るべきところ、取るべからざるところより多からば、自然主義は強ち斥くべきものではなからう。加之、自然主義にして若し、本來非常に重要な意義あるものならば、多少の缺點短所があればとて、之を取ること躊躇すべきものではあるまい。乃ち次ぎに、自然主義本來の藝術上意義もしくは價値を吟味せむとする所以である。

第四章 自然主義本來の價値

時代相應の使命——時代精神と藝術——
 本質要素——(一) 管理的精神——(二) 自由主義の精神——(三) 個人主義の精神——自然主義を外にして近代藝術はあべからず

抑も人類なるものは、各時代時代に相應する使命任務を有つてゐる。藝術の如きも甲時代には甲時代相應の藝術あるべく、乙時代には乙時代相應の藝術があるべきだ。乃ち近代相應の藝術があるべきである。

而してかの政治と云ひ、教育と云ひ、宗教と云ひ、其他文明諸般の事項に屬するものは、各其時代の文明全體の精神と相通するものでなければならぬ。藝術の場合もまた是である。近代藝術の使命と任務は、近代文明全體を貫通する、謂ふところの時代精神 (Zeit-Geist) によつて規定されるべきものである。

改めて云ふまでもなく、近代特に十九世紀以降の文明を構成する根本要素は、

(第一) に先づ實理的精神 (Positive Spirit) である。實理的精神は一面、科學の發達に伴ふ科學萬能の思想であつて、社會のあらゆる方面に經驗的事實を尊び、眞相眞實を重んずるの傾向を作らしめ、また一面、中世あたりの出世間的思想に對する世間的思想であつて、現實現前の生活に執着するの風を養はしめて居る。

(第二) には自由主義 (Liberalism)。佛蘭西大革命以來の自由の精神である。或は民主主義となつて、或は社會主義となつて、また或は激烈なる無政府主義となつて、其他種々なる形をとつて、種々なる方面に現はれては居るが、要するに是れ、教權 (Authority) に反抗し、教權を打破し去らむとする精神である。

(第三) は個人主義。一方には近世産業の發達に基いて、生存競争の激烈となるに従ひ、一方には謂ふところ啓蒙時代の後を承けて、思想の動搖甚しきを加ふるにつれ、人は漸く自己自身と云ふものを思念するに忙はしくなつて來た。而して個人主義即ち自己中心の精神は、一面種々なる意味に於ける利己主義となつて現はれ、一面また自覺自省の風潮として現はれた。輒近の所産帝國主義の如きは、明かに此利己主義の一變體である。かの世紀末人心の緊張せる情態は、また此の嚴肅なる人生問題倫理問題は、正しくこの自覺反省の結果である。

現代の文明は、實に斯くの如き要素より成るかくの如き文明である。

ところで、吾人謂ふところの自然主義なるもの、理想を見るに、その實際的傾向は、かの經驗的事實を尊び、真相眞實を重んずる科學萬能の思想と、またかの現前現實の生活に執着する世間的思想との反映である。印象の鮮明を期すると云ふのも科學思想の影響である。傳習の打破は、形式の上より見るも、内容の上より見るも、共に主として自由の精神に基いて居る。特性の尊重は、一面物の真相をたしかめやうとする科學的思想の要求と、一面また個人主義思想の所産でもある。終りに人間獸性の表現と、とりわけはに對する嚴肅の態度とは、一般科學の進歩や、自覺反省の意味に於ける自意識發展の結果に外ならぬ。其他自然主義の標榜する種々なる事項も、凡べて皆、右の三大要素を中心とする現代文明の根本精神と、密接の交渉を有せざるものは無い。

見來れば、自然主義は現代文明の根本精神と切つても切れぬ關係

あるもの、自然主義の主張はさながらにしてこれ、時代精神の要求である。其主張によし、多少の缺陷があるにもせよ、究竟之によらずして近代人の藝術上任務は盡されるものでない。自然主義全般の價値は、固より其美學上意義を檢覈して、而して後をはじめて嚴密の決定を與へらるべきではあるが、兎もあれ、歴史上已存の流派に就いて之を云ふ時、理想としての自然主義を外にして、竟に現代の藝術なかるべきは、以上文明史上の立脚地よりしても、殆むど證明し得られるかと思ふのである。

理想としての自然主義すらも尚ほ藝術上絶対の軌範を示して居るものとは云はぬ。随分改むべき點、補ふべきところもあるであらう。況してや、その實際に於ては、種々なる短所、缺點のあることは勿論である。また我が日本の自然主義に至つては、議論の上にも作品の上にも、更により多くの缺點と短所とがあることであらう。吾人はもとより自然主義の實際に謳歌するものでない。しかも自然主義の實際に謳歌しないからと云つて、特に日本に於ける自然派の現在に満足しないからと云つて、自然主義其物の主張が有する本来の價値を無視するわけには行かぬ。よしや多少の缺陷があるにもせよ、兎に角その本来の重大なる價値を認めないわけには行かぬ。乃ち繰返して之を云ふ。自然主義の理想をはなれて、近代藝術の取るべき方針は無いのである。

第五章 吾人は自然主義者也

爾餘の藝術に對する吾人の態度——偏重と寛容——直接自家の好惡より見るもまた——

前に已に述べたる通り、人類には一般に各時代時代に相應した使命任務があり、藝術もまた各時代時代に相應する使命任務があり、其使命任務は、其時代の根本精神と相通するものでなければならぬからして、吾人は今日の藝術上要求を以て過去のあらゆる時代

を律しやうとはせぬ。過去各時代の藝術に對するには、各時代相應の標準軌範を以てする。たとへばクラシシズム時代の藝術には、先づ主として統一を求め、調和を求め、中正平明を求むる。ロマンチシズム時代の藝術には、最も先づ感情の熱烈沈痛ならむことを求め、空想の奔放不羈ならむことを求める。が現代の藝術吾人同時代の藝術を品臨し、評價するに際しては、自然主義の主張するところに従つて先づ第一の標準を作らうと思ふ。先づ第一の標準を作らうとは、かのロマンチシズム、クラシシズムに取るところの標準をも、絶對に無視するものではないけれど、それはつまり第二段の詮議にしやうと云ふのである。

乃ち此自然主義の標準に照して見て、格別の價值がなければとて、直ちに排斥し去らうとはせぬ。もし爾餘の標準よりして何等かの取るべきところあるならば、時には、時代と没交渉の作品として、別種の立脚地より、その存在の理由を認めるだけの寛容は有つて居る。

自然主義に對し、是の如き同情ある見解、もしくは是の如く偏重の態度にして、もし自然主義者と云はるべくば、吾人は確かに自然主義者である。精しくは、自然主義以外のものに對する、是の如き寛容なる立脚地が、自然主義者なるべき資格を損ふべきものに非ずとするならば、吾人は正しく自然主義者と名乗るべき權利の有るものである。

吾人は更に自然主義者と名乗るべき、今一つの理由を有つて居る。蓋し、吾人は自然主義以外の藝術、たとへばクラシシズム、ロマンチシズム等の藝術に對しても、少からざる興味を感じて居る。しかも流石は近代人として生れた丈けに、とり分け世紀末思潮の間に人となつた丈けに、自然主義の藝術により多くの興味を感じるものである。即ち遠き時代のものは、不朽の大作と稱せらるゝやうなものにしてからが、それほど讀んで見たくもなく、讀んで見てもそれほど胸にこたへない。之に反して軌近諸派の作品となると、寧ろ

瑕瑾の少くないやうなものであつても、堪まらなく面白いと思ふことが、屢とある。予がホオマアの「イリアッド」、「オデッセエ」を讀むだのは、讀まなければならぬものだと思つて讀むのである。ダンテの「神曲」は、僅かに地獄の一段をのぞいて見たばかり。ミルトンの「失樂園」は、正直はじめの四五頁でウンザリした。スコットの「湖上の美人」などに至つては、學校で講義を聞き、半分以上居眠りした。是は強ち其等の物が、イブセンの脚本、ツルゲニエフ、ダヌンチオの小説などに比べて、甚しく價值が劣つて居ると思つたからではない。たゞ其割合に面白くなかつたからのことである。

是の如く、吾人は自家直接の好惡と云ふことから推して見るも、たしかに自然主義者と名乗るべき充分の資格があるのである。

第六章 自然主義と寫實主義

美學上寫實主義と自然主義——種々なる見解——全然二者を同一視するもの——程度上の差異——性質上の相違——普通の見解——寫實主義は主として先づ理想を排す——自然主義は第一に不自然を斥ける——文藝史上の寫實主義と自然主義

凡そ自然主義を論じて寫實主義に及ばないものはない。乃ち一言、寫實主義自體と、その自然主義に對する關係とに就いて述べて見やうと思ふ。

寫實主義も美學上に之を云ふ場合と、文藝史上に之を云ふ場合とは、聊か其意味を異にして居る。

美學上に謂ふところの寫實主義は、同じく美學上に謂ふところの自然主義と類似するところ少からず、大體に於て殆んど同一の方向を指して居るものではあるが、嚴密に、此兩者の間に如何なる關係があるかと云ふ問題に對しては、随分色々の見解がある。